【研究論文】

開かれた家族

—ユージン・リトウォクにおける家族と社会—

天木　志保美
AMAKI Shihomi

1.「社会の中の家族」という視角

リトウォクは、家族社会学研究の領域では、「修正された拡大家族」の概念を提示したとして著名であるが、彼の学説の全容は意外に知られていない。

「修正された拡大家族」の概念は、しばしばパーソンズの「孤立した核家族」概念に対比され、現代の家族形態をいかに捉えるかという文脈でのみ問題とされる。しかし、彼の主張は決して単にひとつの家族のタイプを提示したにとどまるものではない。そのことは、彼の業績が、都市社会学研究などでも検討されていることからもわかるであろう。

修正された拡大家族論にしろ、第一次集団論にしろ、我々がしばしば耳にするリトウォクの学説は、1960年代後半に論文の形で発表されたものである。彼は著作としては、かなり後になって、1974年、1985年に、それぞれ、

Eugene Litwak and Henry Meyer"School, Family and Neighborhood : The Theory and Practice of School-Community Relations"(1974) Columbia University Press
Eugene Litwak "Helping the Elderly : Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems"(1985) New York, Guilford Press

を発表した。

極めて興味深いテーマであるが、こうした、スクール・コミュニティ・リレーションズ、高齢者介護といったテーマをも含む、非常にキャパシティの大きい理論をリトウォクが展開しているのだということに、ひとまず注目しておきたい。

筆者は現在、リトウォクの議論の全容を捉えたいと試みているが、いまだその途上にある。本論文は、筆者のリトウォク研究の第一歩であるので、やはりまずは彼の家族論を問題にしたい。彼の家族論といっても、さらに限定を加え、リトウォクの「家族を捉える枠組み」に焦点を当てることにする。

とりあげるのは、リトウォクの代表的な論文、「修正された拡大家族」概念を展開したものとして代表的な、

`extended kin relations in an industrial democratic society` E.shanas and G. F. Streib（eds）,"Social Structure and the Family; General Relations" Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall（1965）

そして、第一次集団論を展開したものとして著名な

Eugene Litwak and Ivan Szelenvi, ` Primary Group Structures and Their Functions: Kin, Neighbors, and Friends` American Sociological Review, 34, 461-481（1969）

である。

筆者がリトウォクの家族論に関心を持ったのは、まさにこの彼の家族を捉える枠組みの故であった。

その一端は、'extended kin relations in an industrial democratic society'における家族論の展開にも見ることができる。

本論文は、四つの家族のタイプの記述から始まる。リトウォクは、社会学の文献に拡大親族関係を調べると、少なくとも四つの家族のタイプが見いだされるとする。四つのタイプとは、伝統的な拡大家族、その対極をなす解体する家族、孤立した核家族、そして修正された拡大家族、である。

リトウォクは、産業民主社会の要請という観点から、すなわち、産業民主社会の根本をなすとリトウォクが考える特質に、どの家族類型が適合的かという観点から、産業民主社会においてモデルとなる家族のタイプを抽出しようとする。

リトウォクの家族論は、このように、その初めから、社会という枠組みがあっての家族なのである。家族だけを考察の対象とするのではなく、社会の特質に関する考察があり、家族は初めから「社会の中の家族」という視角から検討される。

こうした視角は、本論文の注に記された、パーソンズ及びパーソンズの説をめぐる諸研究についてのリトウォクの見解に明らかである。

リトウォクは、次のように述べている。

「アメリカにおける核家族構造の機能的有効性についてのパーソンズの仮説を検証するとする多くの研究は、実際にはそのようなことをなんら行っていない。これらの研究が事実上行っているのは、核家族関係が存在するか否かを証明することだけである。しかしながら、パーソンズの見解を検証するということは、核家族構造が、他の家族構造よりも、技術的効率や民主主義を可能にするということを証明しようとするものである。拡大家族構造が存在することは、単にテクノロジーの効率が悪いことや階層分化がうまくいかないことを示しているに過ぎない。両者とも、パーソンズの理論と矛盾しない。階層分化やテクノロジーの効率を調べることなしに家族関係を調べることによって、しばしば、研究者は、実際にはパーソンズの見解を実証していながら、パーソンズの仮説を無効にしたとすることになる。」（リトウォク 1965：292-293）

T．パーソンズ＆R.F.ベイルズの"Family: Socialization and Interaction Process" が刊行されたのが、1956年。くしくも、リトウォクが家族に関する最初の論文、`Group Pressure and Family Breakup: A Study of German Communities` を発表したのが、1956年であった。表題に見るとおり、リトウォクの家族に対する関心の始まりは、パーソンズと同じく「家族崩壊」である。

パーソンズの説、「孤立した核家族」論は、幾多の反論を受けた。その多くは、孤立した核家族の存在を検討する実証的・経験的な研究であった。

実証的な研究という意味であれば、リトウォクも、実証的・経験的な手法を多く用いている。実際、論文「集団圧力と家族崩壊」にしてからが、一読してデュルケームの『自殺論』を思わせるような、仮説を立ててはデータで検証し、という手法を用いて、集団圧力＝集団による社会統制と家族崩壊との関連を調べたものである。

ここでの力点は、パーソンズの仮説を覆したと称する研究のいずれもが、単に核家族関係あるいは拡大家族の存在の有無にのみ目を向けて、パーソンズ理論の核心であるところの「核家族が他の家族構造よりも、テクノロジー効率や民主主義を可能にする」とする説になんら触れていないことにある。そのことにより、それらの研究は、たとえ著者たちが、パーソンズの仮説を無効にしたと称していたとしても、リトウォクから見れば、パーソンズの説をさらに証明するものに過ぎない。

リトウォクが論じたかったのは、まさに「テクノロジー効率や民主主義を可能にする家族のタイプは何か」ということなのであって、そのことによって、初めてパーソンズの説も覆すことが可能となるのである。

問題は「社会の中の家族」をどう捉えるかにあるのであって、「社会と家族の関係性」の捉え方である。

2．官僚組織と家族

1）機能分担の理論

まずは、'extended kin relations in an industrial society' から検討していこう。

リトウォクが産業民主社会の要請と捉えるのは、［1］人々は能力に基づいて判断されるべきこと、［2］もしテクノロジーの進歩によって生じた高度な生活水準を継続したいのであれば、大規模な官僚組織が必要であること、この二点である。

この論文の焦点は、したがって、リトウォクの論述に即して言うと、官僚組織と家族の関係であり、メリットを重視する社会におけるネポティズム（縁者びいき）の問題である。

産業民主社会が存在するのであれば、そのような社会には、ある特定の家族構造のタイプが他のものよりもより適しているはずである。ある特定の家族のタイプが存在するか否かは、何の証明にもならない。問題は、家族のタイプとテクノロジーの進歩、そして民主的社会との関係性である。

産業民主社会における親族構造は、いくつかの要件を満たさねばならない。リトウォクが挙げる要件とは、次の四つである。

（1）目標達成にとっての親族の有効性（というのは、もし親族の機能が、他の組織によってより効果的に扱われ得るのであれば、産業民主社会において、強力な親族構造を正当化する基盤はないであろうからである）。

（2）官僚組織と共存する能力（テクノロジーの進歩には、官僚的なフォーマルな組織が必要であり、しかもそれは家族とは異なった基盤ー客観的、非人格的、等々ーに立つので、家族構造は、官僚組織と並び立ち得るものでなければならない）。

（3）分化促進的な職業移動（民主的社会もテクノロジーの進歩も、人々が能力によって位置を当てられることを要求するので、親族構造は分化促進的な職業移動を可能にするものでなければならない）。

（4）分化促進的な地理的移動（親族構造は、例え親族成員同志が地理的にはなれようと、人々が職を得ることを妨げてはならない）。

前述した四つのタイプの家族構造は、産業民主社会のこの四つの要件と両立するかという観点から検討されることになる。

親族構造の四つのタイプは、それぞれ社会において親族システムの異なった機能を持つ。それによってフォーマルな組織との関係も異なる。少し長くなるが、リトウォクの説を引用してみよう。

「解体する家族構造は、オグバーンが展開したように、親族の義務の大部分が大規模なフォーマルな組織にとってかわられたものである。親族構造に明らかに残っている唯一の機能は、愛情を提供することである。しかし、この機能は、親族集団の失われた機能を補うとは思えず、その結果、家族の絆は非常に弱くなる。

バージェスとパーソンズによって指摘されたように、孤立した核家族の概念は、拡大親族の機能が消失したことが議論されたものである。こうした機能のいくつかはフォーマルな組織に移行し、一方他のものは核家族の中に集中してきた。フォーマルな組織と核家族集団との間に労働の分業がある。核家族は子供の初期の社会化と緊張処理を扱い、一方フォーマルな組織は、多くの他の諸機能を扱う。各々がそれ自体の機能領域を持つこうした労働分業の故に、核家族もフォーマルな組織も産業民主社会に生き残る上で必要である。

修正された拡大家族アプローチは、二つの方法において核家族アプローチとは異なる。

第一に、それは、家族は2、3の専門化された機能に集中されるのではないことを論ずる。まったく反対に、家族は積極的にすべての機能に関与する。製造、保護、メディカル・ケア、年長の子供の教育、高齢者の保護、等々。しかしながら、こうした領域の各々において、それは、目標の達成に部分的にのみ貢献する。他の部分は、フォーマルな組織によって貢献される。第二に、親族の単位は、核家族より大きい。それは、有意義なサーヴィスを交換するいくつかの核家族からなる。しかしながら、これらの家族は、半自立的である。それらは、平等な絆で結びついている。反

対に、拡大家族概念は、すべての機能領域が、フォーマルな組織からなんらの援助もなく、親族集団によって完全にコントロールされていると指摘する。親族集団は、単一のヒエラルヒカルな権威システムを持つ経済的地理的ユニットにきっちり拘束されている。」（リトウォク　1965：294－295）

このようにして、親族集団についての議論は、フォーマルな組織が第一次集団のすべての有意味な活動を引き受けることができるということを暗に仮定する解体する家族から、家族がフォーマルな組織のすべての有意味な機能を引き受けることができるとする拡大家族の概念に至るまで、多様であることになる。

この文章の中に、リトウォクの機能分担への着目がすでに明示されている。リトウォクは、社会的権力＝社会的影響力に着目して、

「どの程度またどのような状況の下でフォーマルな組織が、またどのような状況の下で第一次集団が、そのような影響力の行使、それゆえ社会的な目標の達成に、最適な基盤を提供するか」（リトウォク　1965：295）

を見ようとする。

社会的権力の様式としての、専門性、報酬と処罰、正当性、魅力あるいはリファレンス・オリエンテーションのそれぞれに考察を加えた後、

「画一的に繰り返される事態あるいは社会的に決定された価値」については官僚組織が、「非画一的事態、個人的に決定される価値」については第一次集団がよりよい位置にあることが提示される。

非画一的な課題は、テクノロジカルな進歩に向かう社会の帰結である。我々は常に先立って訓練された専門家も、社会的規範についてのガイダンスもない事態に直面している。

しかしもっと中心的なのは、我々が常に、未知の特異な新しい領域に開かれているということである。特異性を減ずることは、常に新しい問題の幕開けを意味するからである。非画一的事態は常にすべての生活領域において存在する。

機能分担の例として、リトウォクは、まずは家族の排他的な機能とされているテンション・マネイジメントや幼い子供の教育が、いかに精神病医や小児科医、また幼稚園の先生などの専門家によって担われているか、逆に、官僚組織が家族に取って代わったとされる手段的な機能、年長の子供の教育、医療、労働、軍隊でさえもが、いかにモティヴェーション・モラルの維持などの点で、家族の役割に期待しているかを示す。

「社会がその目標達成を最大化したいのであれば、フォーマルな組織と、家族のような第一次集団の両者を用いなければならない。」（リトウォク　1965：307）

フォーマルな組織と家族の関係がこのようなものであるのであれば、

「理論的な見地では、二つの極端なタイプ（解体する家族と拡大家族）は除外される。なぜなら、前者は、非常に弱体な家族構造であるので、家族は分担された機能役割を遂行できないからである。そして後者は、定義上、すべての機能領域をそれ自体でサーヴィスしようとし、フォーマルな援助を拒絶する。これにより、家族と制度の両者が共存することを許容する二つのタイプの家族構造が残ることになる。修正された拡大家族と核家族である。入手し得る資源を最大化するという観点から、筆者は、他の事がらがすべて等しければ、修正された拡大家族は核家族よりも有効なユニットであると仮定したい。修正された拡大家族は、問題に直面して、核家族よりも、引き出す資源の大きなプールを持つからである。」（リトウォク　1965：309）

リトウォクのこの結論は、表１に要約されている。

この表は、修正された拡大家族が、家族と制度的な援助の両者を利用する能力において、最も高いランキングにあることを示している。核家族は次に高いランキングとなる。他の二つの家族形態は、理由

表１　援助の家族的・制度的資源を利用する親族構造のキャパシティ

親族構造	フォーマルな組織を利用するキャパシティ	家族援助を利用するキャパシティ	両者を利用するキャパシティ
解体する家族	高	無	低
核家族	高	いくらか	中
修正された拡大家族	高	高	高
拡大家族	無	高	低

（リトウォク　1965：310・table 13-2）

はそれぞれ異なるが、低いランキングとなる。

家族と官僚組織は、正反対の構造的特質を持つ。家族の、永続性、愛情中心、非手段的、無限定性、フェイス・ツー・フェイスな人間関係に対して、官僚組織は、業績的、非感情性、手段的、限定性、ルールに基づく人間関係、からなる、等々。家族は、こうした官僚組織の特質と共存しなければならない。

「解体する家族構造は、その家族的特性を喪失することによって、官僚制の環境を採用することによって、産業社会に順応したのである。拡大家族構造は、官僚制の内部にネポティズムの規範を導入し、それによって産業官僚制を破壊することによって、同じディレンマに遭遇する。」（リトウォク　1965：314）

パーソンズによる核家族の主張は、家族と産業官僚制、この二つのタイプのシステムが、互いに孤立を保つこと、互いにまったく異なる生活領域で作用するという説に基づいて、両者の共存を説明した。

機能分担の理論は、家族と官僚組織は、すべての領域で機能を分担するとする。ここに、両者の距離を微妙に調節する、バランス・メカニズムの重要性が指摘される。

リトウォクは、この論文ではバランス・メカニズム、あるいはリンケージ・メカニズムについて、多くは論じていない。ただ、そのようなメカニズムの存在によって、官僚組織と家族集団という正反対の環境が、適度な距離を保ちつつ共存することは可能であると指摘する。

家族は、どのように官僚組織に伴う正反対の環境を扱うのであろうか。すでに指摘したように、拡大家族と解体する家族は、この問題を扱うことができない。

「核家族は、それを、孤立のメカニズムによって扱う。修正された拡大家族は、それを、家族を社会的距離の中間点に維持する、リンケージ・メカニズムによって扱う。」（リトウォク　1965：316）

２）職業的・地理的移動と親族構造

産業社会の要求のひとつは、人々が彼らの能力に基づいて、職業的に割り当てられるということである。もし家族におけるすべての人々が等しく才能があり、相互に関連のある職業に関心を持つのでもなければ、この要求は、いずれの親族システムが分化促進的な職業移動に最も寛容であり得るかという問題を提起する。

職業的移動と家族との関係については、リトウォクは、1960年、

'Occupational Mobility and Extended Family Cohesion' American Sociological Review, 25,1

という論文を書いている。さらに、以下の議論を見越して言えば、同じ1960年、

'Geographic Mobility and Extended Family Cohesion' American Sociological Review, 25,1

の論文も書き、この問題に関しては、これらの論文

において詳細な検討を加えている。

本論文では、こうした論文を前提に、要約した書き方をしているので、リトウォクの提示する表を示して、両者の関連を見てゆきたい。

ここでは主要に、拡大親族構造が職業移動と両立しないという見解に対して、反論が企てられている。論点は、3つある。

まず第一は、分化促進的な職業的移動に伴う、ステータスの問題。地位の比較のもたらす不和、価値観、ライフスタイル、コミュニケーション・パターンの相違に基づく不和、の問題である。

これについては、ステイタスの二つの形態—すなわち、等しいと思われるものとのつき合いから引き出されるものと、劣っていると思われるものとのつき合いによって引き出されるもの—を考えることによって、異なったレベルの親族が、もし彼らがステイタスについて異なった基準を用いるのであれば、両者とも満足感を引き出せないとする理由は何もないとする。ステイタスの高い親族メンバーは、敬意によってステイタスを獲得し、低いものは、つながりによってステイタスを獲得するというのである。

第二に、権威構造との関連であるが、リトウォクは、従来の説は、伝統的な拡大家族の権威システムは我々の社会では維持されないことを示した後に、核の自立がその唯一のアルターナティヴだと仮定してきたこと、すなわち二分法に陥っていたとする。唯一の権威システム、核家族の完全な独立、そして連合体の概念を区別することが重要である。

第三に、分化促進的な移動性に対して利用できる資源、という観点をリトウォクは導入する。そして、それぞれの観点から、職業移動に対していずれの親族構造が最も適合的であるかを問うのである。

こうして、表2に示されるように、ここでもまた、修正された拡大家族が分化促進的な移動性を扱う能力が最も高いという結論が、導き出される。

地理的移動についても、同様に、リトウォクがまとめた表を提示することで見てゆくことにする（表3）。

地理的移動と親族構造との関連において、論点は二つである。メンバーの移動を親族集団が正当化するかどうかの問題、そして、地理的移動をサポートする資源の問題である。

「解体する家族、核家族、そして修正された拡大家族は、すべて分化促進的な移動を正当化するであろう。初めの二つのタイプにとって、分化促進的な職業移動は実際問題ではない。というのは、それらは、後に残す親族を持たないからである。差し迫った緊急時を除いて、そのような移動を正当化するとは思われないひとつの家族のタイプは、古典的な拡大家族である。、、、他の事がらがすべて等しければ、修正された拡大家族と拡大家族は最も大量のプールされた資源を持っているこ

表2　親族構造と分化促進的な職業移動

	移動に対するサポート			
親族構造	分化促進的移動によって得られるステイタス—つながりと敬意を通じて	分化促進的移動に有効な資源	権威構造と分化促進的移動の間の一慣性	全体的評価
解体する家族	中	低	高	中
核家族	中	低	高	中
修正された拡大家族	高	高	高	高
拡大家族	低	中	低	低

（リトウォク　1965：319・table 13-3）

とになる。核家族と解体する家族は最も少ない。要約すると、修正された拡大家族は、分化促進的な地理的移動を最も促進することができると、論ぜられる。」（リトウォク　1965：321）

リトウォクの理論は、まずは、フォーマルな組織と第一次集団との間の機能分担の議論に始まり、次に官僚組織と第一次集団が共存する可能性を論じ、最後に、メリット本位の職業配分を可能にするという観点から、分化促進的な職業的・地理的移動性を家族がいかに扱うかを見てきた。こうした検討を踏まえて、リトウォクは、修正された拡大家族と呼ばれる家族のタイプが、民主産業社会の維持において、最も有効であるという主張を導き出すのである。

この論文において、リトウォクが注目しているのは、官僚組織と家族の関係である。家族は、官僚組織との関係において、捉えられている。

しかし、ここで注意しなければならないのは、リトウォクが、官僚組織との関連において四つの家族形態をさまざまに検討しながら、時には、官僚組織に対するそれを、第一次集団といい、親族構造と呼び、時には、家族第一次集団といった述べ方もしていることである。家族と第１次集団、そして親族との関係は、この論文においては明確ではない。

リトウォクの第一次集団論を展開したものとして著名な論文、Primary Group Structures and Their Functions : Kin, Neighbors, and Friends'を検討しようというのは、この意味である。

3．第一次集団と家族

リトウォクは、1958年、コロンビア大学でPH.Dを取得している。そのテーマは、

'Primary Group Instruments of(for) Social Control in Industrial Society : the Extended Family and the Neighborhood'

というものであった。

前述した 'Group Pressure and Family Breakup : A Study of German Communities'（1956）に始まり、リトウォクの著作リストを見ていると、リトウォクの本領は、第一次集団の研究にあると思われる。そして、1969年、リトウォクの第一次集団論を代表する論文である、'Primary Group Structures and Their Functions : Kin , Neighbors, and Friends'が書かれた。

以下、この論文を中心に、リトウォクの第一次集団論を見ていくことにする。

論文の冒頭、リトウォクは述べる。

「最近まで、社会学では、産業社会における『第一次』集団の構造の多様性やそれらの分化された機能についての理論的な説明にほとんど注意を払ってこなかった。」（リトウォク　1969：465）

それは、多くの社会学者たちが、現代産業社会では、第一次集団の研究はほとんど必要がない、あるいは、第一次集団は滅びたという観点をとっていた

表３　親族構造と分化促進的地理的移動

	分化促進的移動を奨励する次元		
親族構造	分化促進的地理的移動の正当性	分化促進的地理的移動のための財政的資源の有効性	全体的評価
解体する家族	非常に高い	低	中
核家族	非常に高い	低	中
修正された拡大家族	高	高	高
拡大家族	低	中	低

（リトウォク　1965：321・table 13-4）

からである。

こうした説の理論的基礎は次のようなものである。

「（1）ほとんどの目標を達成する上で、産業的官僚組織が第一次集団よりも効果的である。（2）産業的官僚制は、第一次集団とは正反対の社会条件を必要とする、というものである。そこで要求される主要な条件のひとつは、第一次集団のメンバーが分化促進的な地理的職業的移動に参加することの必要性であった。」（リトウォク 1969：465－466）

この論理的基盤の設定は、'extended kin relations in an industrial democratic society'において、リトウォクが親族構造と産業民主社会について考察を加えた問題設定と等しい。1969年論文で、リトウォクが解こうと試みるのは、まずは、地理的職業的移動性とリトウォクの言う第一次集団、親族、近隣、友人との関係である。もっと端的に言えば、地理的職業的移動性にもかかわらず、第一次集団が存続し得ることから論証を始める。

1）第一次集団の構造分化

産業社会は、人々の地理的職業的移動を必要とする。そのことは、第一次集団にどのような影響を与えるのであろうか。

初めに近隣関係が考察される。

「近隣関係は地理的な近接によって特徴づけられる。その結果、近隣は互いにフェイス・ツー・フェイスなコンタクトにある傾向にある。同時に、産業化は人々が短い期間しか滞在しないことを要求する。もし近隣関係が地理的な近接を要求し、産業化が短い滞在を要求するのだとしたら、近隣関係が現代産業社会で生き残るには、古典的な第一次集団の次元、すなわち永続的なメンバーシップなしに、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトを強調しなければならない。」（リトウォク 1969：466）

テクノロジカルな圧力は、近隣関係の成員の高度な回転を強要する。しかし高度なメンバーシップの回転にもかかわらず、近隣関係の結合を援助するテクノロジカルなサポートが存在する。それは集団強化のあり方を発展させることによってである。具体的には、移動が秩序づけられていること、新しく来たものと以前からの居住者がすでに多くの基本的な価値や言語、役割を共有していることによって可能になる。テクノロジー社会はそのようなメカニズムを体系的に奨励すると、リトウォクは述べる。

「先進的なテクノロジー社会のプロトタイプとなる職業環境は、大規模な官僚組織におけるプロフェッショナルなそれであるとの指摘がなされてきた。さらに、そのような職業システムは秩序だった変化の発展を体系的に必要とし、、、、それ自体、職業経験はストレインジャーを歓迎する規範の発展のためのトレーニングを提供し、同時に、秩序だった変化は本質的に良いものとして受け入れられるという規範を提供する。さらに、テクノロジー社会は、国家的基盤の産業、マスメディア、国家的基盤の教育の発展を奨励し、そのことは翻って、そのような社会の個々人は、たとえさまざまに異なる職業的スペシャリティを持ったにしても、共通の言語と共通の文化を共有することを意味する。テクノロジー社会は、上昇する生活水準を通じて、多くの人々が専門的な輸送機関を利用することを可能にする。最後に、テクノロジー社会は、個人が長期的なスパン（すなわち秩序だった変化のためのプラン）を考慮に入れることを可能にし、そして人々が内面的に、近隣関係という自発的結社を効果的に運営することを可能にする。」（リトウォク　1969：467）

要するに、テクノロジー社会は、近隣関係のメンバーシップの高度な回転を要求するが、と同時に、高度なメンバーシップの回転にもかかわらず近隣関係が存続し得る条件をも体系的に生み出すというのである。しかし近隣関係が、存続し得るということ

は、それが伝統的な近隣第一次集団と等しいことを意味しない。

親族集団はどうであろうか。

「もし親族構造（すなわち核家族間の関係）が調べられるならば、その伝統的歴史的な意味に中心的なのは、人々が半永続的な生物学的あるいは法的なあり方で関係づけられているということを我々は見いだす。同時に、親族システムは、近隣関係のように、テクノロジー社会において分化促進的な移動性の圧力に直面する。もしこれら二つの考慮すべき点、すなわち、永続的なメンバーシップと分化促進的な移動性、が勘案されるならば、親族システムは、フェイス・ツー・フェイスな関係という伝統的な第一次集団の要求を脱落させることによってのみ生き残り得るということになる。」（リトウォク　1969：467－468）

現代産業社会は、分化促進的な移動性に参加する人々に、最大限の経済的報酬を提供する傾向にある。それは親族が、移動を停止するために伝統的な手段を用いることを妨げる。

しかしここでも、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトの崩壊にもかかわらず、親族の結びつきを維持するメカニズムが働く。

「一般的なポイントは、互いに直接的に地理的に近くに住んでいなかったとしても、コミュニケーションの現代的手段—電話、自動車、飛行機—が、家族や個々人が互いにコミュニケートすることをますます容易にしてきたということである。さらに我々の貨幣経済（テクノロジーの進歩した社会に本質的な）は、ほとんどの目的に対する一般的な手段として、貨幣の利用を要求する。貨幣は容易に素早く移動され得る。そして親族ユニットの非常に遠く離れての援助を可能にする。

あるものは、分化促進的な経済的成功が分化促進的な文化環境を招くので、親族間の仲たがいが生じるかもしれないと議論してきた。この点を否定しなくても、そのような相違は、社会が共通の要素で、多くを提供するという、より大きなコンテクストのなかで生じるということを示す必要があるだけである。マス・メディア、大規模なマス・エデュケーション、等々、すべては共通の文化的言語的基盤の発展を導く。、、、共通性は、ますます、階層のラインを越えて、親族アイデンティティを維持するための十分な基盤となるであろうと指摘される。」（リトウォク　1969：468－469）

親族構造は、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトの崩壊にもかかわらず、存続し得る。しかしこのことは、親族の構造が伝統的なものと同じであることを意味するのではない。

友人関係は、前二者に比較して弱い結びつきである。しかし、まったく同じ社会的圧力（分化促進的移動性）に直面する。個人は友人を選ぶに当たって、より大きな選択の自由を持っている。このより大きな選択の故に、友人関係はその強さの主要な基盤として、愛着を持つ。このような愛着は、フェイス・ツー・フェイスな関係の崩壊を生き残り得るのであろうか。

「ある程度、答は親族集団に対するのと同じであろう。例えば、コミュニケーションの現代的手段。しかしながら、友人の結びつきは、親族集団よりも、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトに対してずっと傷つけられやすいかもしれない。というのは、永続性に対する制度的な圧力がないからである。」（リトウォク　1969：469）

近隣関係、親族集団、友人ピア・グループのすべての検討を踏まえて、リトウォクは次のように述べる。

「我々が指摘しているのは、友人の結びつきは自由な選択や愛着に依存する傾向があるということである。近隣関係の結びつきは、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトに。そして親族構造は、永続的な関係に。なぜ、これらすべての第一次集団は重複できないのかという理由は、いつの時代にもまったくない。しかしながら、我々の議論の主要なポイントは、産業社会においては、こ

れらの集団のそれぞれを分離する圧力があるということである。」(リトウォク　1969：469)

リトウォクは第一次集団の役割を強調するためにと称して、核家族集団の構造にも触れている。

「核家族は伝統的な第一次集団の要求に最も近くかなっている。例えば、フェイス・ツー・フェイス、永続性、愛着、非手段的、そして無限定性。しかしながら、孤立した核家族のキーとなる構造的特徴は、人的資源の欠如である。定義上、それは二人の成人メンバーを持つだけである。サイズにおけるこの制限故に、核家族は、それらが第一次集団の構造の範域に含まれるにもかかわらず、しばしば重要な問題を扱うことができない。かくして、それらは、トラブルの原因が彼ら自身の間—夫と妻—のけんかである場合、テンション・マネージメントの問題を扱うことは難しいことになる（例えば、成人のどちらも、他に対して救いを提供できない)。

さらに、緊密な感情性の故に、家族成員は精神病の初期の状態を、客観的に診断できないかもしれない。最後に、テクノロジーの革新の故に、家族成員はしばしば、すべての問題を扱う基礎として彼らのパーソナルな歴史を使うことができない（例えば、子供たちを扱うための最新のテクニック、デイトについての新しい規範の扱い方、等々)。急速に変化する社会において、二人の成人が、互いに頼るというのでは十分でない。」(リトウォク　1969：469)

核家族について考察を加えた後、リトウォクは述べる。

「我々は、親族、近隣関係、友人関係という第一次集団の主要な力は、孤立した核家族に対する補完的な資源を提供するそれらの能力であると感じる。それらはこのことをなすことができる。というのは、それらは、コミュニケーションの問題を極小化することによって、伝統的な第一次集団の形態に十分近いからである。」(リトウォク　1969：469)

リトウォクは、近隣関係、親族集団、友人ピア・グループのそれぞれについて検討を加え、それらが、急速なテクノロジーの進展にもかかわらず、存続し得るとした。それは、テクノロジーが第一次集団の維持を困難にするような分化促進的な移動性を要求する一方で、また第一次集団の存続を可能にするようなメカニズムをも提供するからである。

「拡大家族親族の間のコンタクトは、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトの崩壊にもかかわらず、維持され得る。近隣関係は、急速な成員の回転にもかかわらず、存在し得る。そして友人関係は、これら二つの問題にもかかわらず、継続し得るのである。このことは、テクノロジーが、遠く離れての迅速なコミュニケーション、そして迅速な集団強化を可能にする故に、可能である。」(リトウォク　1969：465)

と同時に、個々に存続する第一次集団とは、伝統的なそれと同じではあり得ない。伝統的なそれらとは異なる新しいタイプである。産業社会においては、これらの集団は、構造分化する。それぞれにそれぞれの機能を果たすのである。この機能は、脆弱な核家族を補完する機能において、捉えられる。

2）第一次集団の機能

それでは、脆弱な核家族を補完する第一次集団の各々に独自な機能とは何か。

近隣関係は、独自な構造的特質として、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトを持つ。それでは、フェイス・ツー・フェイスなコンタクトの利点は何か。

第一に、反応のスピードである。

「我々は、一方で普通の人々が扱うのに十分単純であり、他方特異であるので大規模な設備では効果的にプログラムされ得ない活動について、語っている。例えば、食事のさなかに1カップの砂糖を借りる必要性、あるいはストアに走って出る予期していなかった5分間の間赤ん坊を見ている

誰かが欲しいこと。これらは両方とも単純で良くあることであり、しかし特異なできごとである。このような緊急事態は、ささいな事がらから大災害まである。フォームとノッソウによれば（1958）主な自然災害に関係したほぼ75％の人々が、最初の2、3時間、隣人や近くに住む親族に助けられたという。」（リトウォク　1969：470）

第二の利点は、同じ地域に住む人々にテクノロジカルに基礎づけられているサーヴィスのすべてである。例えば、水の供給、道路の舗装、学校、等々。人々は共通の問題を持つ。これらのサーヴィスを改善するチャンスは、もし隣人たちが共同で活動した場合、計り知れないほど増大する。

第三に、隣人のフェイス・ツー・フェイスなコンタクトは、学習のために継続的な観察が必要な状況において、役割を果たす。

「社会化の方法の多く―いかにしてよい母親になるか、子供たちの仲間集団が非行的態度や低い学業達成を促進するかいなか―は、近隣関係において生じる。というのは、それは日常的なパーソナル・オブザベーションに非常に依存しているからである。」（リトウォク　1969：470）

要約すると、近隣関係の特別の領域と考えられる、3つの課題がある。緊急時、地域に基づいたサーヴィス、そして学習するために日常的な観察を必要とする活動である。

親族構造は、その永続性によって特徴づけられる。それゆえ、課題が長期的なつながりにかかわる場合、最適となる。

「幼い子供を持つ親たちは、子供を育てる責任を、良き友人たちよりもむしろ親族に負わせる傾向を持つ。、、、、親族は、長期的な医療援助を提供するのに加えて、個人の長期的な人生や態度を形作る上で、決定的な役割を果たすであろう。」（リトウォク　1969：470）

友人関係は、自由な選択と愛着によって、特徴づけられた。

「現代社会は、メンバーシップの重複によって特徴づけられると、我々は指摘してきた。このことは、集団の成員が分けもつある事がらがあり、他は異なっていることを意味する。

また現代社会を特徴づけるのは、継続的な相互に関連しない変化である。テクノロジーは、教育界に変化を導入した。それは、労働界、あるいは余暇時間のそれとまったくマッチしない変化である。もし前述の考察が正しいのであれば、固定された集団に分け持たれ得る要素の数は絶対的に制限されているというのもまた真実に違いない。例を挙げれば、大学に行く子供たちは、両親の知識や関心にはない、一連の問題に直面させられるであろう。例えば、試験のために勉強すること、仲間の扱い、デイト、等々。

両親もまた大学に行っていたとしても、両親が大学にいたころとは、規範が急激に変化してきたので、彼らの知識の基盤は制限されている。」（リトウォク　1969：470）

「我々は、友人集団は、他の集団が一般的な共通性を扱うことができるのに対して、継続的な変動にかかわる事がらを最も良く扱うことができるのだと結論した。それは、友人集団が、集団成員にマッチすることを選ぶ最大の選択の自由を提供するからばかりではなく、相互の愛着という結びつきのみを持つ人々が、互いに適合するよう、より動機づけられるからでもある。友人が支配的になるであろういくつかの例は次のとおりである。衣服のファッションは、ある共通の価値のセットの中で継続的に変化する。リベラルなあるいは保守的な政治的伝統は、なお候補者の選択における変化を可能にする。」（リトウォク　1969：471）

以上の近隣関係、親族集団、友人関係の構造と機能についてのリトウォクの考察は、ここで、ひとつの表にまとめられて提示されている。少々大きな表であるが、非常に理解しやすいものであるので、ここでも提示しておくことにする。

近隣、親族、友人は、それぞれの構造に応じた機能を持ち、遂行するのに最適のそれぞれ異なる課題を持つ。リトウォクは、さらに述べる。

「核家族は第一次集団の古典的な次元をすべて持っているが、人的資源において制限されているので、しばしば第一次集団の機能のすべてを遂行できない」(リトウォク　1969：471)

「これら第一次集団のタイプの組織のどれにも

表4　第一次集団の構造による課題の遂行のレベル

	核家族	拡大家族	友　人	隣　人	非第一次集団
フェイス・ツー・フェイス	高	低	低	高	・極めて低い ・行動の大部分はルールによって秩序づけられている
永続性（生得的）	高	高	中	低	・極めて低い（達成的）
無限定性	高	中	中	中	・極めて低い ・限定あるいは専門化されている
愛　着	高	中	高	中	・極めて低い ・感情的にはニュートラルあるいはインパーソナル
非手段的（個別主義的）	高	中	中	中	・極めて低い ・普遍主義的あるいは契約的
人的資源	低	高	高	高	・極めて高い ・20以上の数 ＊
最適になされる課題のタイプ	二人或いはさらに少ない成人を要する。第一次集団の課題のすべて	低いフェイス・ツー・フェイスなコンタクト、長期的なかかわり、二人以上を要する第一次集団の課題のすべて	なし遂げるのに最も緊密で明らかな同意を要し、しかし相対的に長期的なかかわりを要するような第一次集団の課題	日常的なコンタクトと二人以上の成人を要する第一次集団の課題、例えば、非常時の課題、日常的な社会化、等々。しかしながら、長期的なかかわりを要する課題ではない	専門的な訓練、大資本の投資、非常に大人数の人々を要する課題のすべて

＊せいぜい大ざっぱな推量でしかない。1,000或いは100,000にもなり得る。
（リトウォク　1969：471・table 1）

鋭く対照的なのは、非第一次集団、例えば官僚的関係である。表1（訳者註：ここでは表の4）は、これらの集団がすべての次元において、極めて低いことを示している。この列は、読者に、社会関係を二分するやり方の危険を、明確に強調するために紹介された。ある集団が、古典的な第一次集団の次元のすべてをもたないということは、それを自動的に第二次的あるいは官僚的なものとすることにはならない。これらの極の間には、大きな距離がある。分析を記述するひとつのやり方は、我々がこれらの間に入る集団のいくつかの構造—古典的な第一次集団とは違うが、構造において、他のいかなるタイプの集団よりもずっとそれに近いというような—を特定化しようと試みているということである。」（リトウォク　1969：472）

'Primary Group Structures and Their Functions : Kin, Neighbors, and Friends'の論文は、前半が、上述してきた理論的展開部、後半は、それらを証拠立てるような、1961年にアメリカのデトロイトで、また1966年にハンガリーの二つの都市でデータが集められたという、経験的調査研究の分析となっている。

おわりに —開かれた家族 —

'extended kin relations in an industrial democratic society' において、リトウォクは、家族を官僚組織との関連において、把握した。家族と官僚組織とは機能分担の関係にあり、社会の目標達成において、互いに相補的である。

'Primary Group Structures and Their Functions: Kin, Neighbors, and Friends'の論文においては、第一次集団が産業社会においてなお生き残り得ること、それら親族関係、近隣関係、友人関係は、それぞれ独自の構造と機能とを持って構造分化すること、そしてそれらは、脆弱な核家族を補完する能力において捉えられている。

第一次集団を代表するものとしての家族は、一方で、官僚組織と相互作用し、他方で、第一次集団のそれぞれの集団、すなわち、親族、近隣、友人との相互作用の中で、その存在を保つのである。

家族は、官僚組織と第一次集団という、社会を構成するまったく相反する特質を持つ構造のいずれに対しても、「開かれて」ある。

リトウォクの家族論の最も重要なポイントを、筆者はここに求めている。そうであるからこそ、リトウォクの理論は、パーソンズの「孤立した核家族」に対するまったくのアンチテーゼとなるのである。家族は、社会において決して孤立してはいない。

まだ問題は残る。'Primary Group Structures and Their Functions'の論文で、注意深い読者は、リトウォクが、修正された拡大家族という言葉を使っていないことに気づいたであろう。家族社会学者としては、この問題はやはり解決しておく必要があろう。

また、官僚組織と家族とを、機能分担の関係において捉えるのであれば、リトウォクの言う両者のバランス・メカニズム、あるいはリンケージ・メカニズムとはどのようなものであるのか、理解する必要があるであろう。

これらの問題を、筆者の今後の課題として、ひとまず筆を置くことにする。

＜参照文献＞

Eugene Litwak, 1965 'Extended Kin Relations in an Industrial Democratic Society' in E.Shanas and G.F. Streib (ed.), "Social Structure and Family; General Relations" Englewood Cliffs, N.J. :Prentice-Hall

Eugene Litwak and Ivan Szelenyi, 1969 'Primary Group Structures and Their Functions:Kin, Neighbors, and Friends' American Sociological Review,34, 465-481

今回は、論文中にて引用したものに限った。リトウォクの著作リストについては、次稿に回すことにしたい。